

春の伝道礼拝第3回 (5月19日)

## 一 デナリオンの約束

龍口 奈里子



詩編 第145編14〜16節

マタイによる福音書 第20章1〜16節

今回の伝道礼拝のテーマは「約束」です。古い契約（オールドテストアメント）と新しい契約（ニューテストアメント）の書が一つになりました。聖書は、私たちと神様との契約の書物です。私たちに与えられた恵みの約束です。そのことをもつともわかりやすく端的に教えてくれるのが今日の「ぶどう園の労働者のたとえ」ではないかと思えます。

あるぶどう園にたくさんのおぶどうが実っていました。早く収穫しないとおぶどうが腐ってしまうのでぶどう園の主人が収穫する働き手

を雇い入れるというたとえ話です。

朝6時に町の広場に行き、働く人を見つけて契約を結びました。そして9時にも、正午にも、午後3時にも、なんともう日も暮れようかという夕方5時にも働く人を求めました。彼らと結んだ契約は一日働いて一デナリオンという約束でした。正確には、その契約は最初に雇った朝6時の人たちとだけ結んだ契約であって、そのあとの人には何も伝えられていません。一日の労働が終わった時、雇い主は全員に一デナリオンの賃金を支払いました。しかも夕方5時に雇われた人から順番に支払われ、最後に支払ったのは朝6時からずーと働いていた人たちであったというたとえ話です。一デナリオンとは、当時家族4人が一日生活できる金額でした。

みなさんは、このたとえのどこに注目し、どこに疑問をもったでしょうか。誰もが感じることは、最初に雇われて多くの時間働いた人も、最後にちよつとだけ働いた人も、なぜ同じ一デナリオンの賃

金なのか、しかも最後に働いた人から順番に賃金が支払われたことも合点がいきません。しかし、6節以下を読むと、夕方5時に雇われて働いた人たちが決してさぼって夕方になつたわけではないことがわかります。彼らも朝6時からずつと広場において誰にも声をかけてもらえず、空しく立ち続けていたのです。働きたくても働けない、主イエスの時代の現実の姿がこのたとえの中に隠されているようです。今の時代も働きたくても働けない、一日中空しく立ち続けるしかない人が、この日本の中にも多くおられます。

夕方5時になって、ようやく主人が声をかけてくれ、立ち尽くしていた場所からこの人は呼び出され、ぶどう園で働く者とされたのです。それは大きな喜びであったことでしょう。なんとか今日一日の生活が送れ、家族の命をつなぐことができる。彼らはそう思いながら、主人の招きに喜びながら応

え、出来る限りの働きをしたのではないかと思えます。たつた一時間であっても、一日にふさわしい

恵みに満ちた時間であったはずですが。そして夜明けと同時に朝から働いた人たちにとつても、それは同じであったはずですが。朝一番に雇われたということは、主人の一デナリオンという確かな約束のもとで労働すると、一日の生活が十分に守られることを知っていたからこそ、彼らは感謝しながら働いたはずですが。それなのに、主人が最後に雇われた人たちから順々に支払い、差し出された賃金が同じ一デナリオンであったことを知ったとき、不平と不満が起るのでした。確かに労働時間が異なるのに、賃金が同じというのは不公平な話です。しかし、この矛盾の中にこそ、もつとも伝えたいことが隠されているのです。

「ぶどう園の労働者」のたとえは、主なる神が私たちに結んでくださった「恵みの約束」を表しています。それは神様からのただ一方的な、しかも無条件の約束でもあります。

朝6時から働いた人にも、夕方5時から働いた人にも、等しく支払われた「一デナリオン」という



賃金は、その額が問題なのではなく、主人が一方的に広場で招いて、労働の場所を与え、最後に賃金を支払ったということ、労働者は、それを無条件に受け取ったということ、そこに強調点があるのだと思います。つまり、このたとえの「賃金」すなわち、神様からの恵みとは、どれだけ労働をしたかしないかではなく、ただ一方的な無償の恵みを表しているのです。それは何時間働いたとかいう、私たちの努力で獲得するものではないのだということです。労働に見合った額を当然もらうべきという、そのようなものでもありません。ただ一方的に与えられる、あふれんばかりの恵みなのです。神の約束される「一デナリオン」とは、その日一日の生活を満たす単位であり、その一デナリオンで、人々は空腹を満たし、食卓で笑い、一日の眠りにつく、そのような単位です。その一デナリオンがあることによって、一日を豊かに生きることが出来る単位なのです。だから能力の違いや体力の差、知識の豊かさでもって額が変わるわけ

でもないし、若いからとか、力があるからとか、知恵にたけているとかでもなくて、私たちが生きていく、その命を生きたとき、誰もが等しく神様から与えられている命の糧、それが「一デナリオン」だということなのです。13節以下のたとえの中で、主人の「気前良さ」ゆえの約束なのだともいいます。「気前良さ」ギリシャ語の原文では、ただ「善い」「善である」という言葉だけです。主イエスはこのたとえの中で、「主人の気前のよい」態度から「神の善意」を語っています。主人は働きの時間ではなく、一人一人をみて「この人に何かが必要か」を考え、慈しみをもち憐れみを施した、それが「神の善意」なのです。その神の自由さが際立っているのが、最後の節でしょう。たしかにこのたとえは、いちばん最後に雇われた人から一デナリオンが支給されている、そして最後に、最初から働いた人が一デナリオンをもらったので「後にいるものが先になり、先にいるものが後になる」(16節)という結末になっています。でも

これも神の自由な善意なのだということ。不平を言う人に向かつて主人は「ねたむのか」といいますが、この言葉は「目が悪いのか」という意味です。見るべきものが良く見えないのかと言うのです。主人は知っているのです。暑さも我慢し、一日中働いてきた人たちの勤勉さやだめさを、しかしそこから生まれる「不平」が、やがて妬みへと発展してゆき、その妬みが神の善意を拒んだり「見えなくするだろう」ということをご存知なのです。

私たちがやもすれば信仰に熱心あまり、真面目であればあるほど、朝から働いた人のように、同じ思いを抱くことがあるかもしれません。しかしたとえで示されている通り、主なる神は、神の善意によって、神の気前良さで、最後の一人にも「命の糧」を与え、同じ恵みを与えると約束されているのです。この神の無償の恵みである「一デナリオン」とは、自分たちが得たいと思っても得られないものはありません。ただ神から一方的に与えられる恵みです。神

が約束されたあふれんばかりの恵みの中で、空しく立ち尽くしているところから、一人一人が呼び出されて、神のぶどう園で働く者とされるのです。どれほど無力であつても、病弱であつても、年老いても、病院のベッドに寝ていても、人生に失敗しても、人間関係に躓いて、空しく一日中立ち尽くすしかないような状況に置かれたとしても、神様は等しくわたしたち一人一人を、ご自分の深い哀れみのゆえに、その空しさから私を探し出してくださり、救い出してください、神様のぶどう園の中においでくださるのだということ。このたとえから教えられるのを、このたとえから教えられるのです。詩編145編14節「主は倒れようとする人をひとりひとり支え、うずくまつている人を起こしてください。」「命の食べ物」である「一デナリオン」の約束を喜びをもって受け入れながら、それぞれ働きがなせるよう、一週間の歩みを始めましょう。

(出席30名。文責・編集委員会。要約・菅野静恵)